

参加した先生も含めてディスカッション

- 遺伝子工学の例として、授業の直前に報道された、ラットの成長ホルモンに関するDNAをマウスに移植し巨大なマウスをついたことを話し、人間の遺伝子の操作も可能な時代に入っていることを実感させる。
- こうした技術的進歩に対応する体勢を我々がつくっていかなくてはならないことについての話し合い。

**授業についての生徒の感想**

- 興味・関心を持ったもの（男9、女12）
  - ・人間が絶え間ない努力で医学の進歩に努めて来たが、その進歩のためにまた新たな社会問題が生まれてくることに心の痛む思いがする。
  - ・遺伝子というほんの小さなものの1つが狂っても、まともな人間が生まれないことに驚いた。
  - ・染色体の写真や遺伝子の模型を見て、生物学の進歩に感心すると共に何か恐い気もする。
  - ・人間の命の尊さを感じた。
  - ・大変ためになった。特に遺伝子工学のことは始めて知ったので感動した。
  - ・びっくりした。たくさん印象的なことがあるのですが、うまく表現できない。
  - ・これから社会ではこうした問題をどう扱うか自分たちで決めていかなくてはいけないことが判って感動した。これからもこうした問題をもっと深く知り考えたいと思った。
  - ・総合学習の一つに、今後の食糧問題の話しがあったが、遺伝子工学の進歩で飢餓を救えないだろうか。
- 中立的感想を記したもの（男22、女18）
- 不安・疑問を感じるもの（男2、女4）
  - ・人間は常に進歩を求めていくものだが、こうしたことまで判ってしまってよいのだろうか（生まれるまえに性別や異常がわかつてしまうこと）。このよう

**(4) 総合学習⑨「ことば」についての授業**

**1. 資 料**

授業の指導案は前回（本紀要第27集）掲出済みなので省略する。概略その指導案に沿って授業を行ったのだが、その時に生徒に配ったプリントを、資料として次に掲げておく。

A

1. 今までの学習

松井・田中・徳井・増田・高須・安藤・三橋

な学問の進歩が我々の社会にすばらしいものをもたらすことになるか疑問に思う。遺伝子工学が人間に適用される時代が来たとき、その可否をどう判断するか不安である。子供を生む前から男女が判るとは知らなかった。でも知らない方がよかったと思う。

- ・人間は自然に生まれ自然に消えていく。なぜそれを人間の手が変えなければならないのだろうか。
- 生物学・医学の進歩への驚き（男5、女8）
  - 人間というものが、こうしたことにして手を加えていくとは思いもよらなかった。
- 将来への期待（男3、女1）
  - 遺伝子工学が人間にも応用されるなら、ダウン症の治療もできるようになるのではないか。作物・家畜・利用したらずつと豊かな生活がおくれるだろう。
- 興味・関心がもてなかつたもの（男1、女1）
  - あまりよくわからず、おもしろくなかった。むつかしかった。人間が試験台になっているようでいやだった。

**今後の問題点**

- 内容的に1時間では無理があった。他のテーマでも同様と思うが、2時間ずつ位の時間があるとよいのではないか。
- 生徒の発言・討論が少なかった。もう少し生徒が身近ななものとできる問題設定をすべきだった。一方同席した先生方が積極的に発言されたことにより、生徒は考えるヒントを得たし、各先生の考え方を興味をもって聞いたようだ。今後パネルディスカッション的な進め方も考えてよいのではないかと思う。
- 生徒は教科書から離れたこのような日常的な問題に十分興味を示すように思えた。今後も適切なテーマをとらえてこうした場がもてるといいと思う。

**白 井 宏**

2. ことばの機能 — 4月の復習 —

ア 伝 達  
イ 思 考  
ウ 保 存

3. 動物の信号

4. 人間のことば — 性格・構造 —

ア 信号の信号  
イ 抽象表現  
ウ 分節構造

## “ ゆとり ” の時間を利用した総合学習の展開

### 5. ことばの獲得

- { ア 大きな脳
- イ 社会(環境)

### 6. ことばの力

- { ア 本能の抑制
- 知能の発達
- イ 反省(経験)
- ウ 予測(試行)

B

### 1. 今までの総合学習について

### 2. 「ことば」のはたらきについて — 今まで授業で話したこと —

### 3. もともと単に一種の動物にすぎなかつた「人間」が、他の動物と非常に違つた「文化」を持つようになつてきつた理由は何か?

人間の「からだ」は変化してきつてゐるか?

### 4. 「ことば」の発声は何によつて保証されてゐるか。

- 喋語とは何か。
- この表から、どういうことがわかるか。
- 母親の役割は。

※ある乳幼児のことばの発展過程(7カ月から17カ月まで)の表を示す。  
(『ことものことば』岡本夏木著岩波新書より転載。)

### 5. { ア 富士山

- イ スプーン
- ウ わたし
- エ 夢

○ これらのことばのうち、習得に難しいのはどれか。

○ たとえば、「スプーン」ということばは、どのように覚えるか。

### 6. 赤いりんご という文は、どういう意味があるか。

### 7. 「○」と「りんご」との関係

### 8. 反省と予測

※Aは、本校中学校3年A組での授業の際配布したもの。BはB組でのもの。

※※Aは、授業の目次、Bは、ワークペーパーにしてある。

## 2. 授業のポイント

①4月の新学期、最初の国語の授業のときに、「国語」とは何か、という問い合わせから始めて、ことばの機能について考えておいた。そのことを思い起こすこと

とを、本時の導入とした。大きく分けると次の3つである。

ア 伝達 — 読む・書く・聞く・話す機能で、いわゆる外言語と呼ばれる。

イ 思考 — 読む・書く等の前提になる、「考える」という行為を支えている。内言語と呼ばれる。

ウ 保存 — 記憶する・覚えるという機能である。また、1~7回の総合学習の中で問題になった、ロボット・食物・遺伝子工学等は、まとめて文化・文明と呼ばれるが、それらの達成・蓄積は、ことばを手段とすることによって可能であった、ということにも触れた。

②動物のことばは、信号と呼ばれている。本能にもとづく反射であり、自己や種の生存・保存に必要なものである。大別すると、仲間にに対する親愛表現・危険報知と、敵に対する威嚇表現の2種類である。

③それに対して、人間のことばは第2信号系と呼ばれる。

ア つまり、信号の信号である。「りんご」ということばと、「○」とは、直接何のつながりもない。ことばは物から独立している。従つてことばは、それ自体が自己増殖し、その体系は限りなく豊かに、詳しくなつて行く。反面、外国語や方言というものを産み出す原因にもなつてゐる。

イ ミツバチは、その特有のダンスことばで、ミツの存在する方向・距離等を仲間に教えることができる。しかし彼らは、ミツの不在を教えることはできない。人間のことばは、実体として存在しないものにも命名することが可能である。つまり、抽象表現が可能なのである。このことによつて、人間のことばは飛躍的に豊饒なものになる。一方ウソや誤解というものも発生する。

ウ 人間は、単語を組み合わせて、文を作ることができる。文は、単語(または文節)を分節とする構造を持っており、複雑で多様な表現を可能にしている。そこから思想というものが生まれる。

④人間が人間のことばを獲得するには、次の2つの条件が不可欠である。

ア 大きな脳 — 人間は、本来持つてゐる旧脳(他の哺乳類とそう変わらない、本能・反射をつかさどる部分)の上に、新脳と呼ばれる、たくさんの中のニューロンを持つ部分を、生後1年間をピークに7年目くらいで完成する。この部分が、相対的に本能を抑制すると同時に、聴声機能を有し、发声のための筋肉機能を制御する。つまり、ことばの獲得を機能的に保証する。

イ 人間は、模倣と教育によってことばを獲得していく。従つて、乳児期の母親を中心とする、す

ぐれた言語環境が欠如すると、充分なことばの獲得は行われない。狼に育てられた少女が、人間社会に復帰した後も、極めて貧しい言語能力しか獲得できなかつたことが、そのことをはっきりと証明している。

⑤以上のことから明らかなように、ことばの獲得によって人間は、

ア 本能を抑制し、知能を発達させることができるようになった。そして、その知能を世代を超えて蓄積・伝達することも可能になったのである。

イ さらに、過去を反省することにより「経験」を得、未来を予測することによって、試行錯誤の無駄を減じることができる。つまり、過去・現在・未来という「時間」の観念を獲得し、それを統御することが可能になったのである。

ヒトは、「ことば」によって「人間」になったのである。

### 3. 生徒の感想

- 日常なにげなく使っている言葉も、何年もの月日が流れてもやっと今、ぼくたちの使っている言葉になった。言葉も古い歴史を持っているんだなあ、と思った。
- 人間という動物は、ことばと深い関係にあることがよくわかった。言葉というものが人間という動物を作りだし、進歩させてきた。しかし、言葉というものが、はたして人間のためになっているのか。
- ぼくたちは、知らずに言葉を使っている。今も、自分の頭の中で感じたことを言葉で考え、それを文字にして紙面に書いている。あらためて、人間はすごいなあと思った。
- どんなきっかけがあって言葉ができたのか、よくわからなかった。何故赤ちゃんのような言葉だけでは不自由なのか。（もし不自由でなければ、国語の勉強は不要だと思う。）もしことばが無かつたら、今人間は何をしているだろう。
- 人間は人間それぞれのことばがあるが、他の動物にはことばがあるのかないのか、わからないと思う。たとえあったとしても、人間にわかるはずがない。人間の中でも外国語があり、自分の国のことばしかわからない人間が多いと思う。それなのになぜ他の動物の言葉がわかるのだろうか。
- 人間以外の動物は、言葉はないが実際は話していると思う。
- 話ばかりで、ビデオなんかも使ってくれればよかったです。難しくてあまり理解ができなかった。

（以上男子生徒）

- 以前から、言語（語学）に興味のあった私には、楽

しく聞くことができました。数学のように決まった公式のようなものがないので、先生が話して下さったことがすべて、ということはないと思います。

○ことばについて、あらためて考えさせられました。たとえば、海へ行ってそれに感動したことを、何かに書いて残しておける。お母さん達に話してあげられる。私は、心と心で話ができるらしいなあ、とよく思うけれども、やっぱりそれだけじゃあ、言葉の持つ明確なものが欠けているとわかった。信号の信号、というところで、物とことばは独立している、と教えてもらったけど、そういう小さいころ、私はいつも、ごはんのことなんでごはんとよぶんだろうとか、すごく不思議がっていた。

○4月に教えてもらったことは、だいたい覚えていた。動物のことばのことを信号というのを、知らなかつた。その信号にも種類がたくさんあるのは、家にも犬がいるからだいたいわかるが、私にわかるのはでも3つくらい、喜んでいるのと、恐がったり怒ったりしているのと、おなかがすいて人を呼ぶのくらい。人間のことばのはばの広さに驚いた。

○人間という生き物は、いろんな能力を持っているものだと、改めて教えられました。ただ毎日がなにげなく過ぎているのに、いろんな働きをしているのかと思うと、楽しくなってきます。ことばというものは、毎日使っているけれども、こんなに大切なものだと思っていませんでした。

○今まで8時間も総合学習があったわけだが、どの先生の時間よりも一番難しかつたと思う。しかし、どの時間よりも、人間にとて一番重要なことをマスターする時間に思えた。動物と人間の違い、ことばの必要性、そして人間の脳など、どれをとてみてもひとつひとつ疑問を感じていた。が、この総合学習で、だいぶ獲得したことがあったように思う。

○ねむくてねむくて、「ねむい」という字の石が、天井から降ってきて、それに押しつぶされそうでした。先生の声は、子守り唄に聞こえました。でも今までの中では、とてもおもしろかったです。ほんとうにことばが無かつたら、人間は今の状態に達してなかつたでしょうか。

○ねむくてねむくて死にそうだった。話がとても difficultだったので、私にはあまり理解できませんでした。

（以上女子生徒）

### 4. 授業を終えて

ことばというものについて考えることを通して、人間とは何か、という設問に一歩でも迫ることができたのかどうか。ことばという利器を獲得し利用した人間

## “ ゆとり ” の時間を利用した総合学習の展開

への、讃嘆に終わったように思う。環境破壊、核兵器等の問題に象徴されるいくつかの現象の中で、文明の功罪や、人類生存の危機が現実的に論じられている現状の中で、それはいかにも甘い。ことばが作り上げた文明の疎外現象を、ことばが支える知恵で克服しなければならない。その展望を切り拓くための道すじを探って行くことが教育のはずだ。

教授技術的にもいくつかの欠点があった。生徒も指

摘しているように、50分間ほとんど一方的に話し続けの授業であったこと。ビデオを使うなり、O.H.P.を使うなりして変化を持たせないと、眠くなるのは当然である。また、内容的にも授業の文体も、中学3年生にとって、かなり難解なものであったようだ。難しい内容をやさしい「ことば」で伝えられなければ、いい授業とは言えない。

### (5) 総合学習⑩ 生きているとはどんなことか

——チャップリン「街の灯」を見ながら—— の授業の後で

川田基生

はじめに 総合学習グループの第10回の公開授業を3月3日(木曜)1時間目におこないました。以下、授業の記録と授業のあとでの感想と反省を述べます。  
『3月2日の授業』事前につくった指導案では、1時間でまとめる予定のところ、高校入試合格発表直後、卒業式目前の時期の中学生3年ということで、日ごろの授業への集中力を期待できないため、『チャップリン自伝』を読む時間と、映画を見る時間の2時間に分けることにした。公開授業は後者、2時間目である。

『チャップリン自伝』中野好夫訳からの抜粋  
こうしたドン底の貧乏暮しをしているうちに、母は偏頭痛に悩まされるようになり、針仕事もできなくなってしまった。膏薬がわりにお茶の葉を眼に貼って、何日間も暗い部屋で寝ているよりほか仕方がなかった。ピカソには青の時代というのがあったが、教区の慈善にすがって、スープのチケノトと救恤袋だけで生きつないでいたわたしたちのあのころは、さしつめ灰色の時代だった。シドニイは学校の休み時間に新聞売りをした。稼ぎは微々たるものだったが、いくらかは家計の助けになった。しかし、危機というものはつづいているうちに、必ずクライマックスがやってくる——わたしたちの場合、それはうれしいクライマックスだった。

ある日のこと、眼にはまだお茶の葉を貼ったままだったが、ちょうど母の頭痛がおさまりかけていたときだった。突然シドニイが暗くした部屋にとびこんできた。新聞の束をどさりとベッドの上に投げだすと、「財布を拾った！」と大声にいった。母が受けとてあけてみると、銀貨や銅貨がいっぱい詰っているではないか。……しかも、そこにはゾウリン金貨が7枚もはいっている。わた

したちは文字通り狂喜した。名刺もなんにもはいっていない。信仰からする良心のとがめも、この場合母にはあまりはたらかなかったようだ。不運な落し主のことを思うと、さすがにちょっと気はすすまなかつたが、それもまもなく、きっとこれは神さまが天国から送ってくださったお恵みにちがいないという母の確信の前に、たちまち消えてしまったのである。

母の偏頭痛がはたして肉体的なものだったか、あるいはただ心理的なものにすぎなかつたか、そこまではわたしにもわからない。が、とにかく一週間もするとケロリとなおってしまった。よくなるのを待って、わたしたちはサウスエンド=オン=シーへ日帰り旅行に出かけた。母はわたしたち二人に真新しい服を買ってくれた。

生まれてはじめて見る海は、わたしをすっかりうつとりさせた。輝く陽さしを浴びながら丘の上の道からおりてゆくと、海はまるで小刻みに震えながら、いまにも襲いかからんばかりに身構えている怪物のように、一瞬ぴったりととまって見えた。わたしたち三人は素足になって水とたわむれた。生ぬるい海水が足の甲やかかとを包み、足の裏でやわらかく崩れる砂の感じは、生まれてはじめて知る喜びだった。(生徒に配布したプリントは、ワラ判紙4枚分)

#### 生徒感想文

前に一度か二度くらい、テレビで、チャップリンの黄金時代の映画を見たことがある。画面は白黒でセリフのかわりに音楽が流れ、時々説明のようなものが入るだけだった。それでもなぜかその軽快な喜劇性が人々の笑いをさそった。

そんな主人公のチャップリンが、このような暗い時